

身のまわりの観察学・考現学 ——越谷からハウサランドへ——

中 村 博 一

因 縁

今年度はじめて調査実習科目を受けもつことになった。自分の学部時代は柴田武先生の方言調査ぐらいで、講義としての実習経験は実はほとんどない。大部分は埼玉大文化人類学コースのこわい先輩たちが連れていってくれた自主的な共同調査であった。この調査はそれでも、小松和彦らの埼玉県両神村や児玉町といった神話の祖先によるものから北川辺町、群馬県六合村、長野県栄村へとうつりゆき、90年代半ばまで断続してきた。東京都檜原村が最後になっている。調査をしたい学生がいなくなったという理由からだ。いろいろな人に聞いてみると、実習講座をもつ大学ですら調査自体を避ける行為は、調査論の問題系をさしおいても広くみられる流れのようで、はじめて担当することになった調査実習も受講者がずいぶんと減少しているという。そのため最近はおソドックスな農村調査ではなくアンケートによる意識調査を実施してきたようだ。

とにかく泊まりこみで共同生活をしながら知らない人のうちを訪ねて話を聞くのは非常に面倒くさい。そのうえ20戸の集落で20戸に断れるとどうしようもなかったりする。それはそれで重要な情報だが、めげる。反対にどうしてもいかなきゃいけない義務や義理としての調査観が蔓延すると関係をこわしてしまう。学生は敏感だ。「自分のうちに知らない人がきて話を聞かせてくださいと言われたらやっぱりいやだなと思います。」「実習で農村調査やるんだったら誰もとりませんからね。」引導をわたされた気分で、複数のメニューを用意することにした。いずれも受講者と話し合っただんなことをするのかを決める手がかりになればと準備したのだが、結局、考現学調査や超芸術トマソン観測あるいはハウの物件探索など身のまわりの観察をしてホームページで報告することになった。やはりねちっこいインタビューはさらわれたのであった。

それでも安心はできない。一昨年某大学の講義で観察レポートを課した。200以上の数が集まった。コメントをつけ、プロジェクトで紹介、返却したが、中に真夏のレポートなのに行き交う人々が寒そうなプリントアウトの写真があった。どうも見ええがあるのでネットを探すとトマソンのホームページからのパクリであった。ネットサーチは好きだけれど日常観察は面倒くさい学生もいることを忘れていた。なおこのレポートでは上下逆さ看板の報告がかなり多く、そこには何か意味が読みとれそうなほどで、後で店に行くと中国語の音のかけ合わせとの理由を遅ればせながら「発見」したのだった(写真1)。有名なトマソンを巡礼してみようという企画の報告もあり興味深かった。



写真1 逆さ物件

講義で

今回担当することになった実習は週に2コマ。学生はファーストセメスタ6名、セカンドセメスタ5名。セカンドセメスタの報告は現在も作成中である。ひとつのコマで今和次郎や赤瀬川原平らの著作を紹介しながら構想を練り、もうひとつのコマで観察に挑戦することになった。普段はあまり関心をもたない大学周辺をぶらつくことから始めたが、古書探索と同じく探そうとするとなかなか見つからないのが路上観察なので受講者はあまりおもしろくなさそうであった。要するに出会った結果をまとめた著名な報告のめくるめくようなインパクトというか演劇的なノリがない。日常生活のかつたるさが出会いの非日常性をなぞと説得してもしらけるだけである。大学の周辺は水利研究では全国的に有名(と言ったら誰も知らないと言われたい)な場所であり、水を抜くための水門が民家の隣にあったりする。高度経済成長時代のバイパス風景がまだに残っている場所でもある。

それでも歩くうちに水に取り囲まれた土地の脆弱さと交通安全が交差する象徴的な物件が見つかった（写真2）。また阿部定物件が意外にも多い（写真3）。越谷階段とその後名づけられる物件も複数発見され、とっかかりとしてはなかなかの収穫であった（写真4）。



写真2 ミラーの斜塔

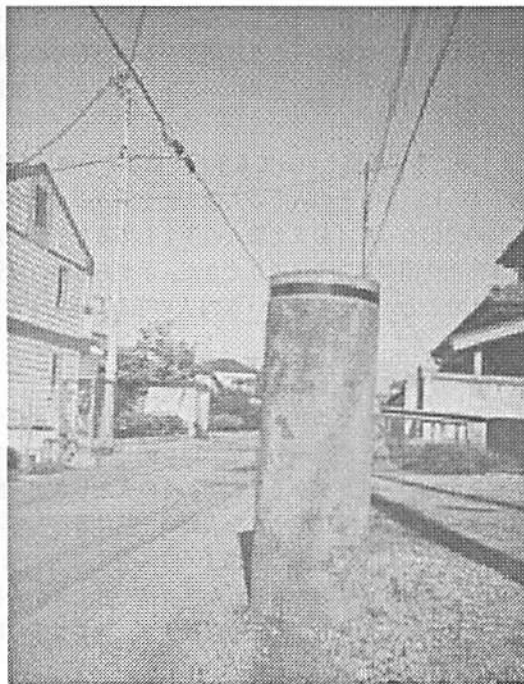


写真3 阿部定



写真4 越谷階段

個人のテーマ

別にひとりひとりのテーマもつくることにした。こちらのほうは学生たちもかなり前向きになった。全員がテーマを決めるまでにはけっこう時間がかかったものの、取りくみとしても結果としてもなかなかおもしろい報告になったような気がする。その中から手・ケータイ・筆箱のレポートをあげてみる。

1) まず手。手の観察といっても手相ではなく手の甲を観察するレポート。目は口ほどにものを言いという表現があるように、手もその人その人の人生を刻みこんでいると言っても違和感がない時間をわたしたちは生きている。初めて出会って「おまえ職人の手をしてるな」って言われすごくうれしかった、というのはわたしの所属する松本市消防団の親方衆の語りぐさだ。手がある種の自分史を構成するのは確かだとしても、実際に観察してみるとどんなことが言えるかという74人の手のレポートだ。以下担当者の言葉を引用して紹介に代えよう。

手考現学—手はその人を現すのか？ 赤木葉子

人の顔は、皆それぞれ異なっています。表情も人それぞれです。けれど、人それぞれとはいっても、全体を見れば人間は頭・顔・胴体・手・足という同じ構成をもって存在している生き物でもあります。同じ身体を持ちながらも、中身の人間が異なることで、その人らしさが、性格的な部分だけでなく表情や動きで体の表面にまで滲み出てくるのです。そこでそんな人間の一部に着目してみたいと思います。ここでは、日常一番よく働いているといってもよい部分、それでいてよくよく見たことの無い「手」を見ていくことにします。顔に表情があるように、手にも表情があるのでしょうか？表情やしぐさからその人らしさを感じられるのと同じように、手からも感じることは可能なのでしょうか？私はまず、数多く手の写真を撮らせてもらうことで考察していくことにしました。

「手の写真を撮らせてもらえますか？」(という質問に対する)反応はそれぞれでしたが、いくつかのタイプに分類可能でもありました。タイプ1:「さっきまで仕事してて手汚れているから・・・」「今荒れてるから・・・」と、今の自分の手は万全な状態ではないと言う人。このタイプは男性には全く見られない。女性のいたい6割がこのタイプにあてはまりました。タイプ2:「太いからやだなー」「短いからやだなー」と自分の手への文句を言いながら仕方なく手を出してくれた人。このタイプも男性には見られない。女性の中でも特に10代から20代の女性で多く見られました。思春期に入る中学生から始まる傾向で大体35歳を過ぎる人にはみられなくなります。タイプ3:この写真は何の為に撮るのかとたずねる人。「手の写真を撮らせてください」などと突然言われれば、きっと誰もが怪しげだと感じるはずですが、このタイプは意外にも6割程度にとどまりました。その中でも、どうして?なんで?とつつこんで聞いてくる人はほとんどいませんでした。タイプ4:写真を撮る前に時計を上に向けるなど手をきれいに見せようとする人。このタイプは40代・50代の女性で数人という程度でした。「そのままの状態でもいいんです」と言ったのですが、「ちょっとまって」と言って袖をきれいにしたり時計を付け直したりきちんと整えてから写真を撮らせてくれました。タイプ5:「両手を広げて」と頼む私に、自分はこう取りたいのだと自らポーズをとる人。このタイプは2人だけでした。1人はカメラマンで「表情をつけたポーズがいい」ということでした。もう1人は「別にそのポーズじゃなくてもいいんでしょ?」ということでしたが、その子はとても仲の良い友達なのでだからこそ言えたことかもしれません。基本的にあえて別のポーズで撮って欲しいという人は他にはいませんでした。タイプ6:特に何も言わずに「いいよ」と一言言うだけの人。女性にも男性にも見られましたが男性の方が多かったように思います。特に35歳から上65歳から下の男性に多く見られました。小学生までは男女問わずこのタイプがほとんどでした。全体的には3・4割がこのタイプにあたります。

結論を出すにはデータが少ないのですが、私が「手」と意識的に触れる中で気づいたことがあります。当たり前ですが、手は皆同じということでした。職人さんなどの手を使う仕事の方などはさすがに、手に特徴があるように思いますが、そうでない多くの人には性別・年齢以外の特徴というのは無いといっても過言ではないでしょう。かといって、人の手は皆同じでしょうか?当然同じはずはありません。それはどういうことなのでしょう。

よう？人の顔の表情というのは遠くで見ていた他人にも見てとることができます。笑っているとか、泣いているとか、寒そうだとか暑そうだとか、そのような事まで分かっけてしまいます。しかし、当然ですが手の表情はそうはいきません。人の手が物語る「その人」を感じたいのならば、ただ手を見るだけではあまりに不十分のようです。手は、触ってみて初めてあったかいとか冷たいとか、すべすべとかかさかさとか、傷がある・・・などそういうことを感じられるのです。しかし、その人の手に触れて質感を感じられるのは、その人にとって近い存在・親しい間柄の人だけなのです。私がそれを感じようというのはあまりに無理な話だったのです。手は見ているだけでは温かいのか冷たいのかそれすら分かりませんが、一度触れてしまえば一気に百のことが分かっけてしまう、そのようにできているのかもしれない。「手の素性は決して人には明かさない」そんな「手」の秘められたる主張が聞こえてきそうです。

2) 次はケータイの形態分類研究である。必要があつて3年前からケータイを使うようになり、気がついたらまわりの消防のおじさんたちはほぼ全員カラー液晶に機種変更、チャクメロの違いを比べあつている。そんな現代の生活ケータイを学生を対象に横に切りとつてみたレポートである。なおこのレポートはカラー液晶が普及する前のものであり、現在はまた異なるケータイになっている。世代交代が激しいのはパソコンと同じくしかも買い換えは容易なのでエルモンヒラタカゲロウの世代交代ダイアグラムのように通時的というか数ヶ月単位の、しかもマイクロというよりも軽くて華やかなブチヒストリーレポートが十分可能だろう。今後の展開も期待したい。

ケータイ 杉田優子

みなさんは携帯電話を持っていますか？きつと持っている人が多いのではないかと思います。今やケータイは働く人達はもちろん、高校生たちにも広く利用されています。その種類も多く、各メーカーから新機種が続々と発売されています。

その上さらに、様々なストラップやステッカーなどを飾りつられたケータイは、本当に人それぞれです。普段の生活の中でケータイを使っている人の姿を何気なくは見えてもじっくりと、どんなケータイなのかを見ることはあまりありません。そこで「今、人々はどんなケータイを使っているのか？」という思いから、この調査を行つてみることにしました。調査は文教大学の学生を中心に行い、携帯電話の写真を撮影、簡単なアンケートに答えていただきました。

(アンケートは以下の通り) 1: 性別・年齢。2: 着メロ (着信音)。3: 自分のケータイを気に入っているか？また、その理由。

調査の結果、ケータイを7タイプに分類しました。1: シンプルタイプ。ストラップなどの装飾がまったくないもの。買ったまま何も手を加えていないのがこのタイプ。2: ストラップタイプ。ストラップがついているもの。市販されているものだけでなくケータイのメーカー名入りや手作りのものなど、その種類も様々。3: キーホルダータイプ。ストラップと違いヒモの部分がない、またはついていないものがこれに当てはまる。4: ステッカータイプ。ステッカーが張つてあるもの。ここではプリクラも含む。5: キズものタイプ。これは飾りというよりもケータイを長い間使っているうちにできた特殊な傷、または破損箇所があるもの。6: 画面写真タイプ。ケータイの液晶画面に写真が映し出されているもの。7: 盛りだくさんタイプ。上にあげた1~6のタイプのうち3つ以上のタイプに当てはまるもの。最も手をかけられていると言えるでしょう。

3) 筆箱レポート。考えてみれば筆箱という表現はいかにも古めかしい。きつとどこかで誰かが筆箱文化史なる大著を著しているにちがいない、かもしれない。ベンケースと言う学生もいるけれど、筆箱は健在である。今時の筆箱は箱ではないものも多く、中に筆もまづない、かもしれない。では何が入っているのか、を調べたレポートである。最近筆箱を家に置きモバイルケースをもつようになってなんだかもの足りずあらためて自分の一部になっていたのだと思わずにはいられない。なおこの原稿は北部ナイジェリアのソコト州ソコト市で書いているのだが、以下の報告でもっともポピュラーなシャーペンがいかに日本的な道具かを実感させられている。大学のロゴ入りのを友人にもつてきていろいろ質問され、使い方から説明しないとまらない。きわめつきは芯が出すぎたら折ればいいのかと聞かれたことだ。

筆箱観察 忠木奈保美

学生さんの相棒、「筆箱」。誰もが持っているモノですが、その外見や中身は様々です。隣の人の筆箱の中身はどうなってるのか？そんな野次馬的根性が動機です。持ち主同様個性豊かな筆箱達。身近な人に声をかけて筆箱とその中身を見せてもらいました。

協力してくれた学生さんは21人（うち男性は9人）、のべ23件分のデータが集まりました。中身の基本データをアイテム別に検証してみます。1：シャーペン（シャープペンシル）、総計46本。鉛筆に代わる筆記用具の代表格。これを持ち歩いていない人は21人中1人だけでした。極細ボールペンの黒がその代わりなんだそうです。最少の1本から最多の6本まで。複数持っている人がほとんどです。1本あれば十分なはずなんですが、ついつい何本も持ってしまうモノ。2：ボールペン、総計97本。うち極細ボールペンが23本、極細ボールペンっていうのは・・・アレです0.3ミリボールで米粒に字が書ける奴です。今回調べた中では一番数の多かったモノ。3色もしくは4色同居型もありました。一番多く持っている人は16本でしたが、使い切ったものを出さずに新しいものを入れていたら16本になっちゃった、という事だと思われます。黒ボールペンの中に2本印鑑付きのものがありません。内訳は、極細ボールペン：黒10本、赤3本、オレンジ3本、メタリックパープル2本、緑2本、ピンク1本、水色1本、紺1本。それ以外のボールペン：黒29本、赤8本、紫6本、緑5本、青3本、黒赤青（3色同居）2本、水色2本、不明4本。以下1本ずつのものが、オレンジ、パステル紫、ピンク、黄緑、蛍光オレンジ、蛍光イエロー、蛍光ピンク、蛍光緑、白、マープル、赤黒（2色同居）、赤青緑オレンジ（4色同居）、赤黒青緑（4色同居）、内訳不明4色同居。3：サインペン（水性ペン）、総計24本。主にマルつけ（答え合わせ）に使われる赤が主流かと思いましたが実際は黒とピンクが赤を凌ぐという結果になり、ペンの種類も様々でした。内訳は、黒8本、ピンク5本、赤3本、オレンジ2本、青2本、茶1本、黄1本、緑1本、スカーレット1本。4：蛍光ペン、総計27本。アンダーラインを引く時にはこれです。今は蛍光ボールペンに押されているようですが・・・。何本も持っているのはなぜか男性に多かったです。内訳は、ピンク8本、黄色3本、緑3本、紫2本、オレンジ2本、茶色2本、赤2本、青2本、黄緑2本、橙1本。5：定規、総計16本。15センチと12センチの2種類がありました。内訳は、15センチ6本、12センチ6本、不明4本。6：修正液、総計15個。うちひとつが修正テープ。7：シャーペンの芯、総計18個。これがないとシャープペンシルも役に立ちません。内訳は、HB13個、2B1個、F1個、不明3個。8：鉛筆、総計6本。9：消しゴム、総計26個。10：カッター、総計7個。11：油性ペン、総計6本。12：その他、以上のモノに分類されなかったモノ、筆箱をひっくり返したら出てきた意外なモノです。中には本人も把握していなかったものも（！）。筆ペン3本、うち1本は仏事用、鏡3個、メモ（内容は秘密）3枚、リップクリーム2個、クリップ2個、スティック糊2個、お守り（学業成就）2個。以下1つずつ、セロハンテープ、電卓（家計簿のためだそうです）、時間割、薬（飲み薬）、家の鍵、櫛、耳栓、しおり、目薬、高校の自転車のステッカー。学業成就のお守りとか時間割はいかにも学生さんです。筆ペンは1人で3本持ってたんですが、仏事用（薄墨のやつです）まで携帯してる人は社会人でもそうそういない気がします。・・・でもあんまり縁起はよくないような・・・。

現代の筆箱にも筆が入っていたと落ちもついている。これら報告の詳細と他の報告については写真がないとわかりづらいこともあり、わたしたちのホームページ：<http://www.bunkyo.ac.jp/koogenga/>を参照いただければありがたい。

ハウサランドの物件

最後にわたし自身の報告で締めくくりたい。実習を担当することになってから以前にもまして意識しながらカメラを携帯するようになった。実習は自分の生活にも影響を与えたようである。これから報告するのは滞在中の北部ナイジェリアはハウサランドの物件であるが、まずは北部ナイジェリアの日常観察自体のむずかしさからはじめよう。

日常観察ではたいがい写真撮影やスケッチが欠かせないことになっている。しかし写真を撮ることが困難だっ

たり、スケッチをしているとスパイとまちがわれる場所がこの世にはある。深刻度はそれぞれずいぶんと巾があるものの、北部ナイジェリアはそうした広がり例になる。理由はよくわからない。ジモティもなんだろうねって首をひねる。なにせ空港など特定施設以外での撮影はまったく法にかなっているのだから。昨年のアフリカ映画祭では隣国チャドのメタ作品『バイバイアフリカ』を見た。久しぶりに帰郷した映画監督が撮影中にビデオカメラを取りあげられる。撮ること＝盗ることだからだと。北部ナイジェリアの状況はそれほど合理的に説明できない。みんな写真好きだし、サッラーの休日に行われるダーバの日には撮影をとがめられることはないからだ。また村でロバや家禽を撮影すると飼い主までがその動物写真をせがむ。「この前おれのヤギ撮ったろ？ あの写真欲しいんだけど。」植物も同様だ。「バナナの写真どうしたの。もってないの？ おかしいじゃないか。」配るのはパニックだ。本人や家族でなくたって欲しがるからである。人数分焼き増ししても学童がどつと押しよせて絶対に足りなくなる。

ところが宿泊施設で結婚式の披露宴に出くわし、いい機会だからと撮影しようとする、どんどん撮れという声に混じり絶対撮るなという叫びが聞こえ事態は少々混乱してくる。また先日高速タクシーに乗っていたときの話。商都カノから500キロ離れたジハードゆかりの地ソコトへ移動中、ハウサ語英語電子辞書を4台もって万が一を考えたので客はわたし一人。この道15年の運転手ハッサンは、写真撮りたきやどこでもとまってやると豪語していたのに、わたしがシャッターを切るたびに気が気ではないのかこちらをふり返る。道中いろんなチェックポイントがある。市内出入りチェック。武装強盗チェック。密輸チェック。ハイウェイパトロールチェック。アミーチェック。袖の下チェック。そのたびにカメラをしまわなければならない。町中に入ってポリスが潜んでいるから気をつけると、ついにやめざるをえなくなった。さらに商都カノのサーボンガリ（新町）・マーケット。ここではひと騒ぎを覚悟せずには撮影はできない。「こら白人、チャイナ写真撮るな。撮るなっつってんだろ、お前だよお前。」そばに警官がいなければ、家族サービス中の非番の空港セキュリティ職員だってレボ役にかりだされる。合法じゃないかと、こりゃアソルトじゃないかと叫んでみても無駄である。友人でカノ生まれのハムザは自分で撮影した市内を動画で見せてくれる。「撮影？ 問題ないよ。あんたも撮れるよ。」でもそういう訳にはいかないのだ。確かにツォフォンガリ（元町）で伝統を売っているクルミ・マーケットでは何も言われない。なぜなのか。ピアフラで知られた内戦の頃、恩師は中国人傭兵と誤解され逮捕されたという。それから30年がたった。しかしナイジェリア国家における異邦人のわたしの位相が今でも、禁止・是認に関わっているのはまちがいない。そこに現代と過去の時間的、都市と村の空間的位相がからまってくる。観光資源としてはクルミ・マーケットよりも、現在を売っているサーボンガリ・マーケットのほうが絶対エキサイティングなのだ。

撮影（記録）する行為と撮影されたものを再度見たり、見せあう行為があつて路上観察はだんだん盛りあがってくる。でも上に書いたように北部ナイジェリアではなかなか思うようにはいかない。OPEC第6位の産油国でありながら、ガソリン不足でスタンドにできる長蛇の列。そんなところがどこにあるだろうか。普段はトマソン化しているスタンドにタンカー（タンクローリー）が到着する日にだけ車やバイクが押しよせる。世界にまずない路上の風景を撮りたい、でもよほどの覚悟がない限り、撮れないのだ（写真5、よほどの覚悟なく手がふるえてしまった）。

そんな鬱々としたある日発見したのがこの物件である（写真6）。見せたいのに見せられない屈折した状況を感じずにはいられない何かが生み出してくる。「拘禁テレビ」「見せものテレビ」と命名してみた。鉄筋で囲まれた檻の中にテレビが入っている。受牢をおおせつかつていることを見事に示す大きな南京錠もついている。久しぶりに戻ったソコト市で「ナカムラ！」と叫び声を聞いたとき同様、見たときめまいがした。檻自体はしごく実用的なもの。パラウォーbarawo（ハウサ語でドロボーのこと）を防ぐための檻である。いや盗ませないぞと訴えかける効果もあるにちがいないが。

テレビは見る／見せる道具であろう。むろん画面を見るのだがテレビ自体を檻に入れている、あるいは檻に入れたテレビという見せものにしてこの物件に、北ナイジェリアのあれやこれやの状況を思い知らされてきたわたしとしては、見るものと見られるものとの関係やあるいは撮るものと撮られるものとの関係をあらためて考えさせられる気がするのだ（写真7）。

テレビ盗からテレビを守る鉄格子。考えてみると檻とは何であろうか。檻はある種の境界であり隔てる仕掛けが檻なのだが、なぜ隔てるのか。例えば動物園の檻は動物が逃げるのを防ぐためにあるのか、人間に危害を加え



写真5 覚悟なく撮影したスタ
ンドの行列、ソッコト市

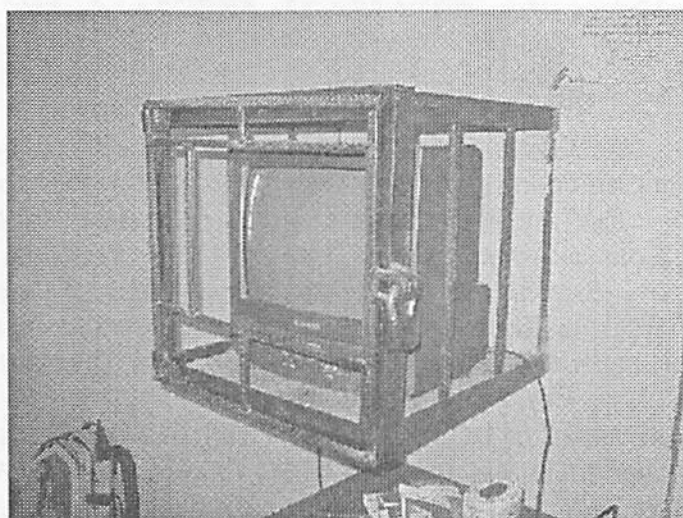


写真6 拘禁テレビ、
ソッコト市

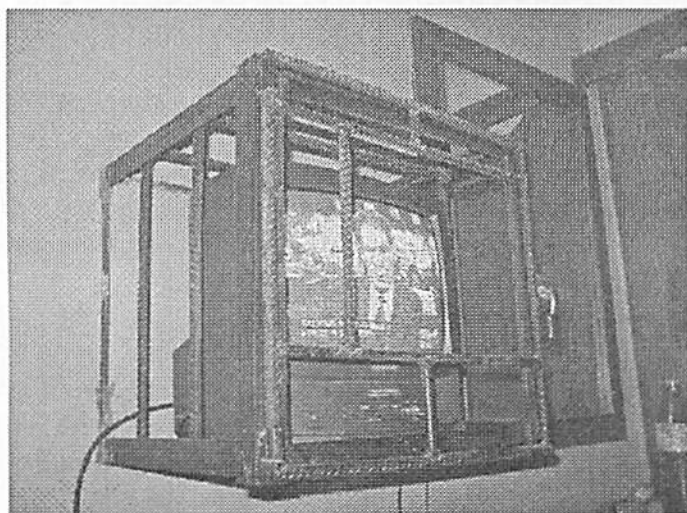


写真7 上映中の拘禁テレビ、
ソッコト市

るのを防ぐためにあるのか、トマス・H・クックの『鹿の死んだ夜』を読んだばかりなので人間が危害を加えるのを防ぐ意味もあるだろうか、と思う。動物が盗まれないようにするためというのものもあるだろうか。テレビをそこに保存しておくための仕掛け。テレビの放し飼いを防ぐ仕掛け（写真8、9、ハウサランドの動物用檻）。

見るものは鉄格子を通してこのテレビを見ることになる。檻に入れているということはテレビの罪を償わせているとも想像できる。ではテレビの罪とは何であろう。見せてしまった罪だろうか。あるいは連日6時間以上停電がある当地で視聴者に十分報えない見せられない罪だろうか。でも画面のところが大きく開いているので償わせながらもテレビを見せようとしているともとれる。一筋縄ではいかない。テレビを監禁しながらテレビの役目を強いているのである。わたしに撮るなど言いながら撮れと言う人々をついつい思い出してしまう。どうもそのあたりの関係性がいまひとつはっきりしないところが問題なのだが。

ところでこの「拘禁テレビ」「見せものテレビ」を興味深く見るわたしは独立した「見物人」の位置を確保していると言えるかというとは実はそうではない。視点をずらして部屋が目に入るようにしてみよう。ターガー（窓）にはすべてバラウオー防止用の鉄筋が入っている（写真10）。わたし自身が監禁されている。あるいは見せものにされているように思えてくる。実際にのぞき込むふとどきものがときどきいるのである。さらにこの部屋をのぞき込むものこそは独立した「見物人」になっているかというとはそうではないのだ。この部屋の外にはくどいようにバラウオー防止用の鉄柵があり（写真11）、部屋の外にいるものも戸外にいるものから隔てられ、ある



写真8 家禽用檻カラガ、
ソッコト市



写真9 ハウサ文学の重要キャラ
鶺鴒（アク）と檻、カノ市

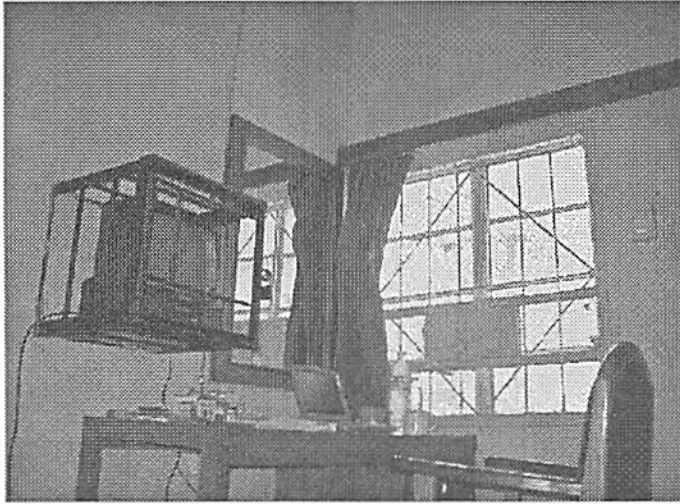


写真10 拘禁テレビと窓の鉄筋、
ソッコト市

写真11 部屋の外の柵、
ソッコト市



いはその見せものになるという風になっている。

ハウサ語のバラウウォーを聞かない日はほとんどないと言っていい。埼玉に住む同僚や友人のドロボーに入られた経験談は田舎者のわたしからすればびっくりするほど多いのだが、ここで聞くバラウウォーをめぐる話はそれ以上なのである。確かに事実だと言うことはできるだろう。電線を盗もうとして黒こげになってしまったり、石油を盗もうとして穴を開けたパイプラインの中で死体で発見されたり、さらにその穴をふさがなかったため引火爆発、多数の死傷者が出ることもめずらしくないのだ。信じられないような窃盗に関わる事件がナイジェリアでは報道される。しかもしょっちゅうである。相変わらず武装強盗yan fashi da makami もはやっている。もっとも、ある程度の生活をしている人々がねらわれるのだが、現場写真？付き記事を見るとぞっとする。命をとられないための札束を強盗の見えるところに置いて寝ていた80年代の日本人ビジネスマンは今でも首都アブジャやラゴスでその習慣を続けているのだろうか。

この檻を撮影した宿でも以前一瞬のうちにブレイカーがかっさらわれたことがあった。しかしながら、わたし個人の経験からすると夜出歩いてもきわめて安全な場所だと言うことができる。大都市カノで深夜バイクの後ろに乗っていても問題は交通事故ぐらいだ。町中でボシットを下げていると売り子がこうやって持てと世話を焼いてくれたりもする。だからポーッと歩いていていいということはないけれど、とにかく今までつきあってきたかぎりでは非常に安心できる場所なのだ。

にもかかわらず周囲にはバラウウォーに関する言説が過剰と思えるほどあふれている。バラウウォーと疑われ

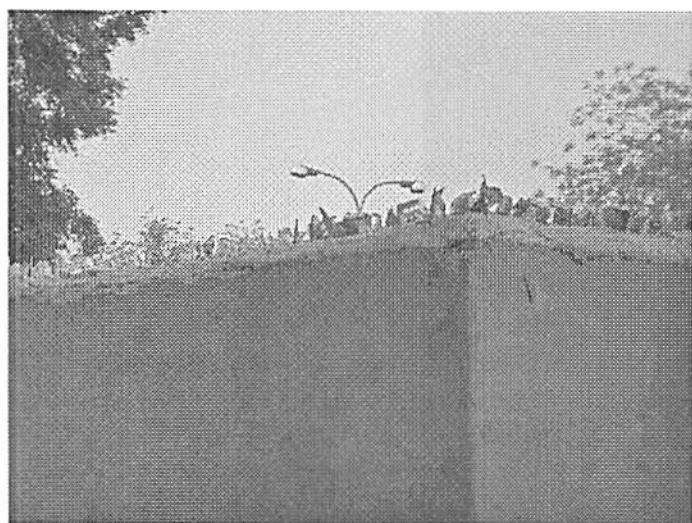


写真12 外壁のバラウオー
防止用ガラス片、ソッコト市

2日牢屋に入れられていた友人ムタリの悲劇は涙なくして聞けなかった。老ガギは服を切れ金を盗まれそうになったとポケットについた薄い線を見せてくれた。そして民話 *almara* 中のバラウオー。砂漠の民トアレグとハウサ間の冗談関係はよく知られているが、バラウオーをめぐる笑い話がある。ある日トアレグの男がハウサの町にやってきた。かついできた荷物を置くと、ハウサが男に注意する。「気をつけなよあんた、バラウオーがいるから。」「バラウオーってなんだい？」あいにトアレグはバラウオーを知らなかった。しばらくして戻ってみると置いた荷物が無い。「あれあれ、ここに置いた荷物が無いよ。」ハウサいわく「ほーらそいつがバラウオーってんだ、あんた。」カノの友人に聞いてみる。「バラウオーって本当にいるのかな、お前見たことあるの?」「なに言ってんだい、なくなってはじめてバラウオーだってわかるんじゃないか。バラウオー見つけるのはむずかしいさ。」そう言えばそうなのだった。

むかし地中海沿岸から陸路ナイジェリアまで旅をしたことがある。この先へ行くと悪いやつが多いから気をつけるとそのたび注意されついに大西洋岸に到達してしまったのを思い出す。サハラ以南でトレーラーが故障した以外は安全な道中であった。誤解が生む現実、幻想が生む現実、現実が生む誤解と幻想。いろいろ考えてみるとこのような語りを含めバラウオーをめぐる現象が北ナイジェリアの生活を描いたりつくりだす上である種の演題になっているのではないかという疑問がなんとなくわいてくる(写真12)。

ドリュモアの『恐怖心の歴史』は恐怖を具現化した16世紀アウクスブルクの「にせの市門」の描写ではじまるが、バラウオーに関わる「何か」を表象している物件はハウサランドの町々でいろいろ見つかる。外部からの侵入者に対するガースワー(町を囲む防壁)は風化して見る影もないが、現代の対バラウオー物件の多くはがっちりと金属の枠や檻で囲われているので「囲いこみ物件」と名づけてみた。周囲にあるものをすべてチャンスと見ることにたけている人々＝バラウオーに警告を与える物件。クーラーやブレーカーはその例である(写真13、14)。囲いこまれるものがない場合には枠・檻のみが残って、その空間を保存している。不動産に付着してなんの役目も果たしていないのにきちんと保存されている無用物がトマソンだが、これら抜殻は枠や檻自体がトマソンと考えられると同時に保存された空間そのものもトマソンとなる相互にからまった不思議な物件だ(写真15、16)。

自分の想像力を試されている点で北部ナイジェリアの日常は刺激にあふれている。しかもわたしの想像力は負け続けている。まったく、あんまりおもしろいから撮影させないのじゃないかと思いたくなるほどだ。機会があればこれら以外の物件も報告してみたい。

おわりに代えて

調査実習をきっかけに身のまわりの観察に力を入れはじめた。いや、力を入れすぎると対象が特定の方向に変

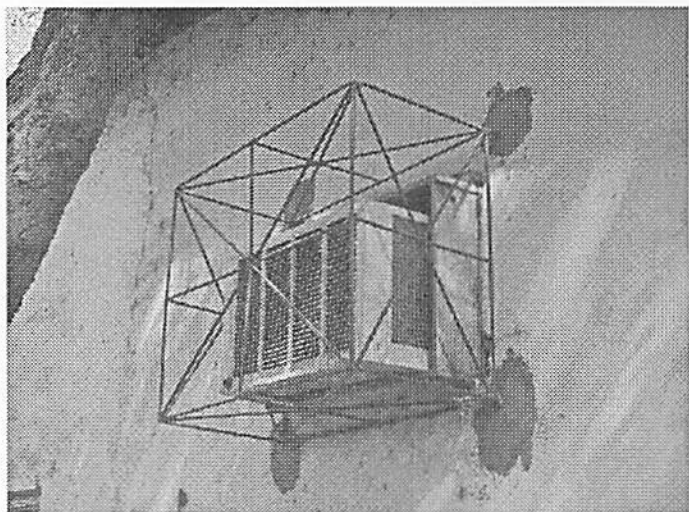


写真13 クーラー囲いこみ物件、
ソッコト市

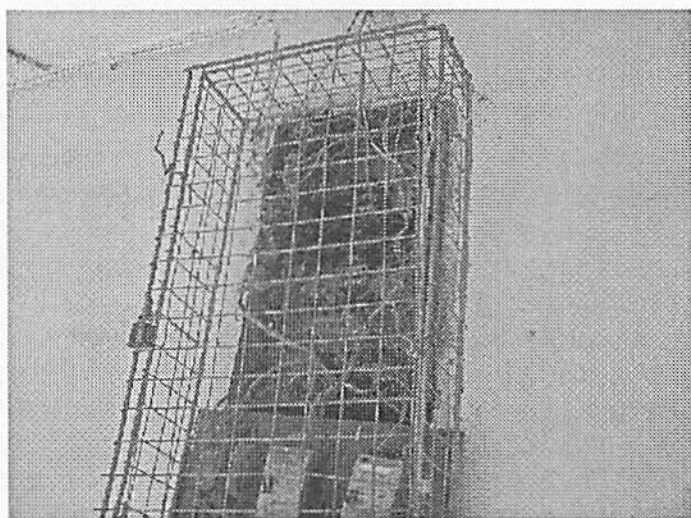


写真14 ブレーカー囲いこみ物件、
ソッコト市

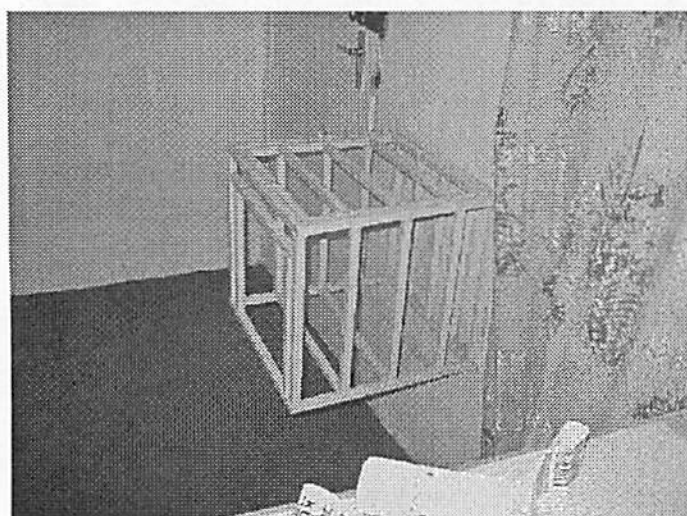


写真15 テレビのいない檻、
カノ市

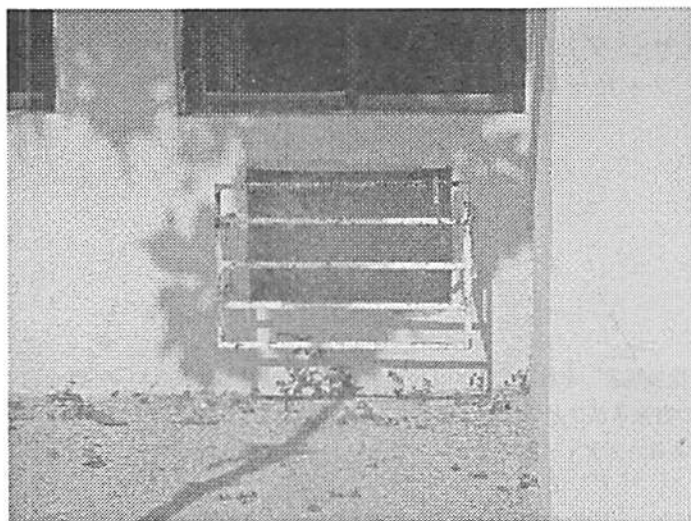


写真16 クーラーのいない檻、
カノ市

形し、忘れの構造や老人力のような視点を生みだすかすかな期待もきつと抱けなくなるから、適度と言うべきだろうか。この数年路上の手袋とバス停の物件を個人的に収集してきたが少しずつ視点を方向転換していこうとわたし自身感じはじめているのかもしれない。幸か不幸か新年度も実習担当になってしまった。受講者が何を求めているのか何に向いているのかそんな観察から出発しないとならないのが今日の実習である。そして何をさせようとするのかこちらこそしっかり観察されている。

文献

- 赤瀬川原平 (1987) 『超芸術トマソン』 ちくま文庫
クック、トマス・H (1994) 『鹿の死んだ夜』 文春文庫
ドリユモ、ジャン (1997) 『恐怖心の歴史』 新評論